

---

# 風はいまだ吹かず

橘川芙蓉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風はいまだ吹かず

### 【Nコード】

N9579R

### 【作者名】

橘川芙蓉

### 【あらすじ】

幕末の長州。混迷の世に生まれ百年名を残さんとする東行は、自分の進むべき道を模索する。そんななか、婚儀の話がもちあがり…  
…?!

この世に生まれたからには、百年名を残す人物たらんと思つたのは、いつのことだったのか。

東行は、江戸伝馬町の座敷牢からの帰り道ふとそんなことを思つた。学問の師、人生の師と仰いできた吉田寅次郎に別れをたつた今告げてきた。藩命により、東行は故郷の萩へ戻らなければならなくなつたからだ。

吉田寅次郎は、老中暗殺未遂の咎で、故郷萩の野山獄に投獄されていたが、寅次郎の求心力を恐れた幕府の策略により江戸に護送されてきた。東行は、時を同じくして藩命により江戸の昌平坂学問所で学んでいた。師の獄をたびたび見舞うが、おそらくこれが最後になるであろうことは、うすうすと感じていた。

別れの際、寅次郎は木製の格子越しに「良く主に仕え、妻を娶り、子をなせ」と言葉を送った。寅次郎は、混沌とした世を立て直さんとする志士であり門下生にも「志士は溝壑こうかくに在るを忘れず」と教えるほどである。その寅次郎が、なぜか東行には平凡であれと告げた。

東行はその言葉を唯々諾々と首肯することはできず、師と論じたが寅次郎はとりあうことをしなかった。

己が、「疎にして狂であるからか」と志士としての自分の素質の無さを振り返つて、気持ち沈み足取りが重くなる。同じ私塾に通い友である義助は、「天下の英才」と寅次郎から褒められるほどの才能をもっていたが、東行はそれに比べ飛びぬけた才能は持っていなかった。

自分の進む道は、どこにあるのか。

十九歳である東行の自分探しの旅は、始まつたばかりであった。

帰郷する途中の宿場町で師の処刑を東行は知った。罪人の処刑後、首はさらされ死体も

寺に放り投げられて土葬はされない。弔いをしたいと東行は江戸へとって返そうと思いつたが、藩命に背けば脱藩となり故郷を追われることになる。

師である寅次郎の影響で、「世を変えたい」と思いはするものの心の底から望むのが何であるのか判らない東行は、脱藩をする決心がつかなかった。

結局東行は、いつか必ず江戸に再び戻る、と決心し故郷萩の地を踏んだ。

萩に帰り、両親に帰郷の報告をするとすぐに婚儀の話を父親から聞かされた。防長一の美人と謳われている井上平右衛門の次女マサが結婚相手だった。婚儀までは相手の顔を知らないのが通例であるが、東行は今後長い間連れ添うことになる妻がどのような人となりであるのか、どうしても目で見たかった。

天下に名を名さんとする者、足枷になるのは「妻と子」とはよく言ったもので、志士であろうとするなら足枷になる妻を迎えるべきではない、と東行は思っていたが己はたった一人の跡継ぎ息子である。世を変えたいと思うが、両親の孝行を疎かにすることはできなかった。跡目を継ぎ、また次代の子を成すことができこそ孝行である、と東行は考えていた。矛盾していると誰に言われるでもなく気がついていたが、己を育ててくれた両親を捨てることは東行にはできそうになかった。

元来、あまり考えることをせずすぐに行動に移す東行は、こっそりと井上家に向かった。垣根の間からでもマサを除き見ようというのだ。井上家は、東行の家よりも家格が上で東行の両親は断るどころかまたとない機会であると、喜んでいた。名家であるので、「防長一の美人」というのも、褒めすぎではないか、と東行は穿った気持ちのまま井上家の前まで来た。

さすがに、山口奉行を務めるだけあつて井上家は白堀に囲まれ、とてもではないが覗き見るといふことはできそうにない。そこであきらめてしまうのが、普通の人であるが東行は違った。

幸いにも、マサが近くの神社に毎日お参りに行く習慣があることを、東行は聞き出していた。ならば、先回りして待ち伏せこつそりと顔を伺うことができるはずである。早々に、東行は、垣根から垣間見るのをあきらめマサが日参している神社へと足を向けた。

神社に足を運ぶのは、幼いころ境内で遊んで以来だ。この神社は比較的この地域では大きい規模で境内には、御茶屋が一軒ある。赤い毛氈の敷かれた竹の椅子に日よけの傘が差してある。

そういえば、ここの団子は結構旨かった、と風になびくお茶屋の「お団子あります」と書かれた旗を東行は横目で見た。境内には、神木の他に大きな楠木が植えられていて旅人や、訪れた人々が休憩にと木の根元に腰掛けている。

東行もその人々にまぎれることにした。参道からほどよく陰になつているあたりに、腰を下ろす。

そろそろマサがやってくる時刻である。東行は、はやる気持ちを抑えてこつそりと木の陰から参道へ目を向ける。

年頃の娘が幾人かの供と乳母らしき初老の女をつれて参道を楚々と歩いてきた。娘は、比較的小柄である東行よりも、さらに小さく華奢な印象だ。黄の地に経紅緯洗黄で、花の模様が描かれた小袖を着ている。品のいい赤朽葉の取り合わせで娘らしい着こなした。

「あの娘がマサだろうか」と東行は、聞き耳を立て彼女が誰であるのか、名前を誰か呼びはしないかと、期待する。

娘がふと、東行の座っている楠へと振り返った。

色白の穢れ無き肌色に、武家の娘らしく凜と研ぎ澄まされたような黒目がちな目つきと、意志の強そうな引き締まった桜色の唇が東行の目に留まった。夜の帳を切り取ったかのような艶やかな黒髪を結い上げている。遠目でよく分からなかったが、飾り細工の施された簪を挿している。一瞬、娘と目があつたような気になり東行は、

わずかに鼓動が早くなる。

美しい、と東行は感じた。

本殿の前で祈りを捧げる後姿を、東行はじっと見つめた。参拝が終わったのか、女たちは御茶屋で休憩をすることにしたようだ。

御茶屋の赤い毛氈の引かれた椅子の上に、娘と初老の婦人が並んで座る。お供たちは少し離れたところで周囲を警戒しているようだ。お茶と団子を注文したようで、二人は他愛も無い話をしている。

東行は一言も聞き漏らすまじと、耳を澄ましている。

娘は、手に持っていた巾着袋から色とりどりの色紙を取り出す。膝の上に数枚並べて、手にとって見比べている。時折、色紙を持ち上げて日に透かしている。娘が腕を持ち上げ袖からちらりと覗いた決め細やかな色白の肌理に、東行は思わず息を呑んだ。

「このお色であれば、喜んでくださるでしょうか」

「はい、必ず」

何のために、色紙をならべてみているのか東行には想像はつかなかったけれども、婦人が娘の問いかけに太鼓判を押したとき、娘が頬を緩め耳をわずかに赤くしてはにかんだのを東行はただ、見惚れていた。

東行とて遊びは一通り心得ている。馬関にも、島原にも、吉原にも、品川の岡場所にも通い馴染みがあることもあった。その女たちは総じて、紅に染まった唇をきゅつとあげ、艶やかに微笑み男を誘う。その誘いに悪い気がするわけがない。そのような笑顔を見慣れていた東行にとっては、掛け値なしの純粹な娘の笑顔は、ぼんやりと通り過ぎてしまった初恋にも似た気持ちを抱きこかせた。

女たち二人は、まだなにやら話している様子だ。己の目的は将来の嫁の顔をこっそりと確認するためであったので、誰かに咎め立てされる前にここを去るのが得策だと、東行は思った。

結局、あの娘が「マサ」であるかどうか確証を得ることはできなかった。名前を誰も呼ばなかったのだ。平素、人の名前をいちいち

呼びながら話をするにはまず無いな、と東行は内心苦笑した。

自宅へ帰る道、ずっとあの娘のことを考えている己に、「これは、惚れたかも知れぬ」と心の中でつぶやいた。

婚儀をむかえ、マサが自分の家で共に暮らすことになった。白無垢姿のマサを見たときには、思わず見惚れた。

あの時の娘は、やはりマサだったのだ……！

白無垢姿で澄ました表情のマサと、あの時神社で見かけた無邪気な笑顔を見せた娘の姿が重なり、東行は胸の奥が震えた。

婚儀の間、来客者と何を話したのかほとんど東行は覚えていなかった。隣に座るマサが気になって仕方がなかったのだ。ようやく夜を向かえ、一足先に出て行ったマサの後をすぐにでも追いかけていような気に東行はなっていた。通例どおり、宴に來ている客人たちに、後を追うことを止められなんとかふりきり、自分たちの寝室に向かうときには心が躍った。

部屋までの長い廊下には、誰が考えたのか一定の間隔ごとに、小さな雪洞が置かれ足元を照らしていた。その雪洞は東行が別の場所へ行かないようにと案内でもするつもりか、自分の部屋への道のりまで置かれていた。丸くぼんやりと光る雪洞の明かりが、ゆらゆらと揺れて、東行は螢火を思い起こした。

「もの思へば 沢のほたるもわが身より あくがれ出づるたまかとぞ見る」

不意に、東行は歌が口から零れ落ちた。熊野詣の和泉式部の有名な歌だ。

あれが僕の魂か。

一直線に、自分の部屋に向かっている雪洞の並びに東行は思わず小さく笑った。誰も彼もが自分たちの婚儀を祝ってくれたが、その中に一番祝って欲しかった師の姿が無い。

あの方は、祝ってくれただろつかと手燭で前方を照らしながら歩く東行は、自問した。

答えは、出なかった。

一声、声をかけて東行は障子を引いた。部屋はすでに暗く、二組並べられた布団とその横に白い襦袢を身につけ体を小さくして座っているマサがいた。脇に乱れ箱が置いてある。東行が部屋に入ると、体を緊張させながら、作法どおりに両手を床に着きマサは頭を下げた。

「ふつつか者ですが、よろしくお願いいたします。旦那様」

震える声でマサに「旦那様」と呼ばれるのは、悪くないと東行は思った。けなげな姿に、東行は微笑がこぼれる。

何事も考えることよりも行動するほうが先になってしまう東行には珍しく、事を急ぐことは無い、と手燭から部屋の置き行灯に明かりを移した。

部屋がいくらか明るくなり、マサの表情もいくらか緊張がほぐれたように見受けられた。

「あの、旦那様にお召しただきたくて、仕立てました」

マサは脇においてある乱れ箱から、単を取り出して向かいに座る東行の前に差し出した。差し出された単を見て、東行はあやうく声を上げそうになった。

これは、あのときに見た色紙の色と同じではないか。

どうやら、東行が覗き見に行ったあの日、マサは乳母と一緒に色紙を布地に見立て、東行のために仕立てる単の相談をしていたようだ。

無言で東行は単を手を取った。縫い目はひと針ひと針丁寧に縫われていて、心のこもった品であることがすぐにわかる。手触りのよい麻の単は秋口とはいえ、まだまだ暑い日もあるこの季節、すぐに着れそうであった。おまけに帯も仕立てたようで、木綿の柄入りの角帯は単と合わせるととても品のよさが現れた。

自分の趣味とぴったり一致する単と帯の贈り物に、東行が感動し



していると不安そうな目で見上げているマサと目が合った。今にも泣き出しそうに瞳に涙をたたえている。

そういえば、己は先ほどから無言で単を眺めていた。さぞかし縫い目までじっくりと検分している嫌味な男だと思われていただろう。東行は、今にも浮かれた声を出しそうな自分を叱咤するため、軽く咳払いをした。

「礼を言う。僕のために単を仕立ててくれるとは思わなかった。帯も僕の趣味にあっている」

東行の言葉に安心したのか、雲の間からのぞく太陽のようにはつと顔色を明るくして微笑んだマサに東行は、またしても見惚れた。

僕は、心底マサに惚れているらしい。

ぼんやりと、口を半開きにしてマサを見つめながら東行は、心の中でつぶやいていた。

妻に「格好良いところ」を是非ともみせてやりたい、と意気込んでいるのはいいものの、江戸遊学から帰郷後、東行は無為であった。世の中が刻々と移り変わろうとするその直前の混沌とした流れを焦りを持って東行は感じていた。

この世に名を残す志士としての志と、マサに「格好良い」と言つて貰える一石二鳥のことはないかと、東行は考えていた。ちよつと、そのころ友人である小五郎から海軍修練の話聞いていた。これまで、海軍の必要性は無かったが他国の船が度々日本に現れる以上、海軍は早急に必要だと東行も感じていた。

東行は、マサを伴い近くの海岸を散策していた。友人たちと家に集まり、藩や国家について語るのも好きであったが、こうしてマサと特に目的も無く出歩くのも東行は好んだ。マサも嫌がらずについて来てくれるのだから、悪くないと思つてくれているのではないかと東行は考えている。

「海軍をどう思う?」

いきなり東行から振られた話に、マサは首をかしげた。カイグンなどというものを、マサは知らない。

「カイグンとは、何でございましょうか」

「大きな船に乗り、藩や国のために戦う侍のことだ」

「大変なお役目でございますね」

マサは、返答した後少しだけ、顔を曇らせた。微妙な変化を見逃さないのが東行である。

「どうした?」

「旦那様も海軍になりますのか?」

心配でございませう、と海の風に消えてしまいそうな小さな声でマサは呟いた。

「嫌か?」

「舶来の船にお乗りになるのは……怖いと思います」

「ただ、とマサは言葉を続け隣を歩く東行を見上げた。

「旦那様が海軍になるのは素敵だと思えます」

言いたいことだけ言って、ぷいっとマサは顔を逸らしてしまった。

言われたほうの東行は、口をわずかに開けてぽかん、としている。

ひよっとして、自分に向いているのは海軍なのではないだろうか?

人生の追い風ははまだ吹いてはいないけれども、これこそが自分の道ではないだろうか。

東行は、言葉にならない歓喜の声をあげて波打ち際まで、逃げてしまったマサを追いかけた。

師が教えてくれたことを少しもできてはいない、と東行は常に思っている。何かをせねば成らないという想いが空回りすることが多かったけれど、今は、その「何か」が掴めそうな気がした。

波打ち際にマサを捕まえて、東行は自分の足が波に洗われるのも気にせずと言った。

「僕は、海軍に入る」

そう、上士として生まれついた自分は、藩政の中枢へ向かうこと

ができる。そこで自分にしかできない「何か」があるのでは無いだろうか。

東行は、自分より小さくて不安そうにしているマサを抱きしめた。まったく心配はいらぬのだと、伝えるように。

この数カ月後、東行は海軍修練のため藩の所蔵する軍艦「丙辰丸」に乗船することになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9579r/>

---

風はいまだ吹かず

2011年3月26日23時55分発行